

その具体策としては、次の通りである。

### ① 絵画史料の網羅

各地の絵画記録等を、時代の古い順に年表風に一覧整理する。当時の太鼓台の状況を、可能な限り追体験する。それが次表の(1)「年表—各地における`初めての太鼓台、登場」であり、それを補強した(2)「年表の補強史料」である。これらは、本テーマ解明の基礎資料となる。

### ② 実見した簡素な太鼓台

更に、各地で実見してきた簡素・小型の太鼓台を、(3)祖形的な各地太鼓台一覧表(92頁)及び、それを補完する画像として提示する。その画像と過去の各地の絵画史料等とを比較することにより、より一層「草創期太鼓台のカタチ」がイメージできるのではないかと思う。

### ③ 太鼓台に影響を与えた神輿の存在

草創期太鼓台の誕生や導入を考察すれば、祭礼の主役である神輿から大きな影響を受けていることが想像される。神輿から太鼓台へ伝えられたモノには、一体何があったのだろうか。太鼓台のどの部分に影響が顕れているのかを、探っていく。①～③の作業で、これまでに登場した小型で簡素な太鼓台の全貌と、太鼓台に先行して登場した神輿との関係性が浮かび上がってくるはずである。

### ④ 太鼓台の`遺伝子、探し

次に、各種太鼓台に共通して潜む太鼓台の`遺伝子、探しを行なう。その結果、「遺伝子=荒々しい担ぎ」であることが明らかとなる。広いエリアに散らばるさまざまな形態の太鼓台が、間違いなく草創期からの`遺伝子、を持っていることを、具体例を見ながら確認する。このように、遺伝子を仲立ちとして各地・各種の太鼓台を眺めることで、「太鼓台文化のつながり」が実感でき、カタチの異なる太鼓台同士が、間違いなく「単一の文化」であることを、より強く感じるができるようになる。

### ⑤ なぜ、草創期の太鼓台探しを行なうのか

太鼓台文化は伝統文化であると言うが、`広く認知された、文化とは言えないのではないか。伝統文化と言うのなら、せめて、太鼓台が初めて誕生した概要について、縷々解明されてしかるべきと思う。この文化圏では、その解明努力が見えてこない。「草創期の状況が、ほとんど知られていない」というようなことがあってはならない。「文化のルーツを知り、そこからどのように発展し、今日に在るのか。それを今と将来に、どう活かせるのか」という、この文化を当り前に再認識し、得られた共通理解を、文化伝承の厳しい環境下でも、精神的な支えとして活かさなければならない。だからこそ、そのための太鼓台・ルーツ探究は、絶対に避けてはならない。

#### (1) 年表—各地における`初めての太鼓台、登場

	和暦	西暦	確認史料名等・太鼓台所在地	ワンポイント
1	宝暦8	1758	松原八幡宮「御神事御規式定」記録 / 姫路市松原八幡神社 粕谷宗閔氏著『播州屋台記・飾磨彫刻史』(S60年刊、26頁)他	享保13年(1728)に神輿太鼓3台の記録。(木場村・松原村・中村) 太鼓台として確認できる最古記録
2	寛政元	1789	「神輿太鼓扣覚帳」/ 旧・伊予三島市(四国中央市)	153軒から銀約750匁を集めて神輿太鼓を建造
3	寛政元	1789	大野原八幡神社「御神事行烈入用覚帳」 ちょうさ太鼓 / 旧・大野原町(観音寺市)	享和2年(1802)の記録の中にあり。
4	寛政6	1794	越智正道氏著『安芸国・斎島の伝承と産土蛭児神社』(私家本) 神輿太鼓 / 呉市豊浜町斎島	初めての神幸を記録した板碑の裏面に、 先導を務める神輿太鼓(=檜)の記録あり。